



馬耳東風

未曾有の金融危機だそうである。耳にタコができるほどニュースで聞かされたサブプライムローンなるものの破綻に端を発したこの米国発の経済危機により、倒産したリーマンブラザーズといった金融機関のみならず、米自動車3大メーカー（ビッグスリー）までが揃って経営危機に陥っている。そのため、米民主党は、昨年秋、金融安定化法の公的資金枠を活用して250億ドル（約2兆5,000億円）を緊急融資する法案を提出した。この公的資金による救済を米議会の公聴会で訴えるためワシントン入りしたビッグスリーのトップ3人が会社の自家用ジェット機でワシントン入りしたことが分かり、議会でやり玉に挙げられた。アカマン下院議員（民主）が自家用機使用を「釈然としない」と批判、旅客機のファーストクラスにするよう持ちかけた。またシャーマン下院議員（同）は「自家用機は今売って、商業便で帰ろうという人は拳手を」と迫った。しかしこれらの指摘に3トップは無言・無反応のままだったという。ABCテレビによると、ゼネラル・モーターズ（GM）のワゴナー会長の自家用機は会社所有で3,600万ドル（約36億円）。ワシントンとデトロイトの往復には約2万ドル（約200万円）かかるが、民間航空便のファーストクラスなら約840ドル（約8万4千円）で済む。フォード・モーターのムラーリ最高経営責任者（CEO）は、週末、デトロイトからシアトルの自宅に自家用機で帰っているという。

われわれ庶民にはあまりに桁外れの話で、なぜそのようなことがまかり通ってきたのか理解に苦しむ。会社が順調に業績を挙げているなら、「ビッグスリーのトップですごいね」ですまされる話かも知れない。しかし、自分の会社が政府（国民の税金）の援助なしにはつぶれるかも知れないという瀬戸際に、その援助を頼みに来た人間としてはあまりに見識であり、それまではたして待遇に見合う仕事ができきたのかとの疑念を抱かざるを得ない。どうしてこのような経営者ばかりになってしまったのだろうか。

ベルリンの壁、それに続くソビエト連邦の崩壊以来、社会主義、共産主義は完全に影をひそめてしまい、それに反比例するかのように資本主義は暴走してしまった。労使一体となって地道な努力を続け発展してきた会社を、目先の利益追求のためだけに買収し、利益があがるとなるとすぐに売り飛ばしてしまう「はげたかファンド」と呼ばれる巨大投資会社。これらの会社は、何かというと株主の権利を声高に主張し、株式市場を席卷してまさにやりたい放題の狼藉ぶりである。これが市場原理主義の実態である。昨秋には原油の生産量が落ちたわけでもないのにガソリン価格が異常な高騰をみせ、何がなんだかわけがわからにうちに以前の価格に戻った。これも彼らのなせるワザである。わが国は、終身雇用という何よりのセーフティネットを築いていたのに、市場原理導入という名のもと、この美風を投げ捨て、米流資本主義に追随したため、あっという間に人心は荒廃し、

いまや社会崩壊の危機に直面していると言っても過言ではない。

人間は切磋琢磨することにより発展する。思想も人間の所産である以上同様である。現在、資本主義は、社会

主義、共産主義という対立軸を失って暴走している。早急に軌道修正しないと人類の破滅を来すと危惧するのは杞憂であろうか？われわれを希望に満ちた未来へと導いてくれる新たな思想家の出現を切望している。 (久)

